Dr.ジチ
全国リレーエッセー
鳥取県

思いやりの心を忘れずに

青木（あおき）　哲哉（てつや）　18期生、1995年卒

二〇〇七年九月四日のことです。午後九時三十四分、私の携帯電話の呼び出し音であるロッキーのテーマが鳴りました。この音は、救急車からの救急要請のみに使用していましたので、私の体は緊張感で硬直しました。

救急車に乗って

ここでは生命に危険が及ぶと考えられる患者さんに対して、医師が救急車に同乗する「ドクターカーシステム」を構築しています。救急要請の内容は、土砂崩れで一人が生き埋めになったとのことでした。外は一時間の雨量が九八ミリという豪雨でした。十九歳が被災者という第二報を受け、私は消防署の指揮車で現場に向かいました。

現場は二次災害も懸念される危険な状況でした。消防署員たちがチェーンソーで家の柱を外すなど救出作業をする中、私は、胸部まで土砂で覆われた被災者の左腕を洗い、点滴をして、血圧を上げる薬が使えるよう準備しました。被災者は何とか救出されましたが、その直後に血圧が下がり、顔面蒼（そう）白になり、脈が触れなくなってしまいました。意識は問題なかったので、血圧を上げる薬を使いながら救急車まで搬送しました。

出発した途端、患者さんは急変しました。「おなかが痛い。我慢できない。早く麻酔をかけて眠らせて」と言って苦しみました。何ともなかったおなかが、腹膜炎の状態に変わっていました。救急病院で腹膜炎であることを告げ、患者さんは緊急手術を受け救命されました。小腸断裂でした。

私は二〇〇〇年から二年間、県の派遣医師として琴浦町（旧赤碕町、当時は人口八千人）に勤務しましたが、離任の時、将来ここへ戻ってほしいという千二百人の署名が県に提出されました。このことが義務年限を明けた今、この地で働いている最も大きな理由です。

進む医師の疲弊

現在、地域では医師の確保は大変困難で苦労があると思います。医師数が少ないためシステム化して働けず、医師の負担が多いことも現実でしょう。不幸にも現在の医療には、医療者、患者の双方に思いやりが欠けていると思います。患者さんに対して、説明不足や態度の悪い医師、時間外診療にしか来ないなど「モンスターペイシェント」と呼ばれる患者。その結果、医療訴訟は増え、医師の疲弊が進んでいます。地域医療の再生にはお互いを大切にする気持ち、つまり、思いやりが重要ではないでしょうか。

前述の救急処置も、多くの患者さんが「良くやられましたね」とねぎらってくれました。これからも思いやりの心を持って、救急医療をはじめ地域医療に貢献したいと考えています。

（次回予定は石川県）

救出活動を行った土砂災害現場。高さ40メートルにわたり裏山の土砂が崩れ、家屋に流れ込んだ

医療法人社団赤碕診療所

【私の勤務地】琴浦町は人口約二万人、鳥取県の中央に位置する日本海に面した町。二〇〇四年に東伯町と赤碕町が合併して誕生した。赤碕診療所は〇六年四月から指定管理者制度の下で、町から委託され運営している。